

## 補外法と特異不動点問題

長崎総合科学大 長田直樹 (Naoki Osada)

### 1. はじめに

$E = \mathbf{R}^N$  または  $\mathbf{C}^N$  とし,  $G : E \rightarrow E$  とする.  $N = 1$  の場合の  $G$  の不動点を求める Aitken-Steffensen 公式は,  $N > 1$  の場合に以下のようにして拡張できる:  $k$  を自然数とし,  $T : E^{k+1} \rightarrow E$  とする. 初期値  $y^0 \in E$  を選ぶ. 各  $n = 0, 1, \dots$ , に対し,  $s^0 = y^n$ ,  $s^{i+1} = G(s^i)$  ( $i = 0, \dots, k-1$ ) とし,  $y^{n+1} = T(s^0, \dots, s^k)$  とおく. ベクトル列  $(y^n)$  を,  $T$  に関する Steffensen 型反復列と呼ぶ.  $T$  として, 連立方程式に対する Steffensen 変換 (Henrici[6, p.116]), ベクトル  $\epsilon$  算法 (Brezinski[1], Gekeler[5]) および最小多項式補外 (Skelboe[16]) などを取り上げられている.  $G$  が不動点  $x^*$  の近傍で Fréchet 微分可能で  $G'$  が Lipschitz 条件を満たし,  $I - G'(x^*)$  が正則, 初期値  $y^0$  が  $x^*$  に十分近く, 各  $n$  に対し,  $T(s^n, \dots, s^{n+k})$  が定義出来れば, Steffensen 型反復列  $(y^n)$  は,  $\|y^{n+1} - x^*\| = O(\|y^n - x^*\|^2)$  を満たす ([8][9][17]).

$I - G'(x^*)$  が特異なとき,  $x = G(x)$  を特異不動点問題と呼ぶ.  $N = 1$  の場合, すなわち  $G'(x^*) = 1$  のときは, 3つの方法が考えられている:

(i)  $x^{n+1} = G(x^n)$  によって生成される数列  $(x^n)$  は,  $G$  がある種の条件を満たすときには,  $x^n - x^*$  は漸近列  $\{(\log n)^\alpha / n^\beta\}$  に関する漸近展開で表せる. そこで,  $(x^n)$  に修正  $\epsilon$  算法, 修正 Aitken  $\delta^2$  法,  $\theta$  算法や Lubkin の  $W$  変換などを適用する (Sablonnière[13,14], Sedogbo[15]).

(ii) Aitken-Steffensen 反復列は線型収束するので, もう一度 Aitken-Steffensen 反復を行う. (Ostrowski[12], 伊理[7])

(iii) 修正 Aitken  $\delta^2$  法を用いて Steffensen 型反復列を作る. (Sablonnière[14])

本論文では,  $N \geq 1$  の場合の特異不動点問題の反復列の漸近的性質と, 補外法の適用について述べ, 数値例による比較を行う.

### 2. 反復列の漸近的性質

#### 2.1. $E = \mathbf{R}$ のとき

Sablonnière は de Bruijn[3]の結果を用いて, 次の定理を与えた[13]:

定理  $G(x)$  は

$$G(x) \sim x + \sum_{j=2}^{\infty} c_j (x - x^*)^j$$

を満たし, 数列  $(x^n)$  が  $x^{n+1} = G(x^n)$  によって生成されるとき, 以下が成立する.

(i)  $c_2 < 0, c_3 = c_2^2$  のとき

$$x^n - x^* = -\frac{1}{c_2 n} + O\left(\frac{1}{n^2}\right).$$

(ii)  $c_2 < 0, c_3 \neq c_2^2$  のとき

$$x^n - x^* = -\frac{1}{c_2 n} + \frac{1}{c_2} \left(1 - \frac{c_3}{c_2^2}\right) \frac{\log n}{n^2} + O\left(\frac{1}{n^2}\right).$$

(iii)  $c_2 = 0, c_3 < 0$  のとき

$$x^n - x^* = \sqrt{-\frac{1}{2c_3}} \frac{1}{\sqrt{n}} + \frac{c_4}{2c_3^2} \frac{1}{n} + \frac{a_3 \log n}{n\sqrt{n}} + O\left(\frac{1}{n\sqrt{n}}\right),$$

ここで,

$$a_3 = -\frac{1}{4} \left( \frac{3}{2} + \frac{c_4^2}{c_3^3} - \frac{c_5}{c_3^2} \right) \sqrt{-\frac{1}{2c_3}}.$$

(iv)  $c_2 = \dots = c_p = 0, c_{p+1} < 0$  のとき

$$x^n - x^* = O(n^{-1/p}).$$

2.2.  $E = \mathbf{R}^N (N > 1)$  のとき

自然数  $i (1 \leq i \leq N)$  が存在して,  $x^*$  に十分近い  $x$  に対し,

$$\|G(x) - x^*\|_\infty = |(G(x) - x^*)_i|$$

で  $(G(x) - x^*)_i$  が定符号かつ

$$(G(x) - x^*)_i \sim (x - x^*)_i + \sum_{j=2}^{\infty} c_j (x_i - x_i^*)^j$$

が満たされているときは, 反復列  $x^{n+1} = G(x^n)$  に対し, Sablonnière の定理が適用できる. ここで,  $x \in E$  に対し,  $x_i$  は  $x$  の第  $i$  成分を表す.

2.3.  $E = \mathbf{C}^N (N > 1)$  のとき

$x \in E$  に対し,

$$\|x\|_\infty = \max_{1 \leq i \leq N} \{|\operatorname{Re} x_i|, |\operatorname{Im} x_i|\} \quad (\mathbf{R}^{2N} \text{ の最大値ノルム})$$

と定義する. 自然数  $i (1 \leq i \leq N)$  が存在して,  $x^*$  に十分近い  $x$  に対し,

$$\|G(x) - x^*\|_\infty = |\operatorname{Re}(G(x) - x^*)_i| \quad [|\operatorname{Im}(G(x) - x^*)_i|]$$

かつ  $\operatorname{Re}(G(x) - x^*)_i$  [  $\operatorname{Im}(G(x) - x^*)_i$ , resp. ] が定符号で

$$\operatorname{Re}(G(x) - x^*)_i \sim \operatorname{Re}(x - x^*)_i + \sum_{j=2}^{\infty} c_j (\operatorname{Re}(x_i - x_i^*))^j$$

$$[\operatorname{Im}(G(x) - x^*)_i \sim \operatorname{Im}(x - x^*)_i + \sum_{j=2}^{\infty} c_j (\operatorname{Im}(x_i - x_i^*))^j, \text{ resp.}]$$

を満たすときにも Sablonnière の定理が適用できる.

3. 特異非線型方程式に対する簡易 Newton 法

特異不動点問題の重要な例として, 特異非線型方程式に簡易 Newton 法を適用して得られる反復がある.

$F: \mathbf{R}^N \rightarrow \mathbf{R}^N$  は、零点  $x^*$  の近傍で Fréchet 微分可能とし、 $\det F'(x^*) = 0$  と仮定する。 $x^*$  に十分近い出発値  $x^0$  ( $F'(x^0)$  は正則) をとり、簡易 Newton 法

$$x^{n+1} = x^n - F'(x^0)^{-1} F(x^n)$$

による反復を考える。

$$G(x) = x - F'(x^0)^{-1} F(x)$$

と置くと

$$G'(x) = I - F'(x^0)^{-1} F'(x)$$

より、 $I - G'(x^*)$  は特異になる。このとき、 $G'(x^0) = 0$  が成立している。

逆に、特異不動点問題  $x = G(x)$  が、 $G'(x^0) = 0$  を満たすとき、

$$F(x) = x - G(x)$$

と置くと、簡易 Newton 法は、

$$x^{n+1} = x^n - F(x^n) = G(x^n)$$

となる。

( $x^n$ ) の誤差評価については、[4]を見よ。

#### 4. 特異不動点問題に対する補外法

$E = \mathbf{R}^N$  または  $\mathbf{C}^N$  とし、 $G: E \rightarrow E$ ,  $T_n: E^{n+1} \rightarrow E$  とする。 $k$  は  $G$  と  $x^0$  と  $(x^n)$  によって定まる自然数とし、 $T = T_k$  とおく。 $G$  が不動点  $x^*$  の近傍で Fréchet 微分可能で、 $I - G'(x^*)$  が特異と仮定する。 $N = 1$  の場合の自然な拡張として、 $G$  の不動点  $x^* = G(x^*)$  を求める 3 つの算法を考える。

算法 I.  $x^{n+1} = G(x^n)$  によって生成されるベクトル列  $(x^n)$  を、 $T_n$  により加速する。

```

n := 0;
{ read x0 };
y0 := x0;
repeat
  n := n + 1;
  xn := G(xn-1);
  yn := Tn(x0, ..., xn);
until |yn - yn-1| < ε;

```

算法 II.  $T$  に関する Steffensen 型反復を 2 重に適用する。

```

n := 0;
{ read y0 };
repeat
  n := n + 1;
  t0 := yn-1;
  for i := 1 to k do
    begin
      s0 := ti-1;

```

```

    for  $j := 1$  to  $k$  do  $s^j := G(s^{j-1})$ ;
     $t^i := T(s^0, \dots, s^k)$ ;
  end
   $y^n := T(t^0, \dots, t^k)$ ;
until  $|y^n - y^{n-1}| < \epsilon$ ;

```

算法 III. Steffensen 型反復列 ( $y^n$ ) を  $T_n$  により加速する.

```

 $n := 0$ ;
{ read  $y^0$  };
 $z^0 := y^0$ ;
repeat
   $n := n + 1$ ;
   $s^0 := y^{n-1}$ ;
  for  $i := 1$  to  $k$  do  $s^i := G(s^{i-1})$ ;
   $y^n := T(s^0, \dots, s^k)$ ;
   $z^n := T_n(y^0, \dots, y^n)$ ;
until  $|z^n - z^{n-1}| < \epsilon$ ;

```

$T$ として、算法 I では、ある種の対数収束列に対し有効に働く加速法をとり、算法 II と III では、Steffensen 型反復列が線型収束し、かつ線型収束列に有効に作用する補外法を用いる。  $N = 1$  の場合、前者の加速法としては、Levin  $u, v$ 変換、Lubkin の  $W$ 変換、 $\theta$ 算法、 $\rho$ 算法、一般化 $\rho$ 算法、修正 $\epsilon$ 算法、修正 Aitken  $\delta^2$ 法などが該当する。後者の加速法としては、Aitken  $\delta^2$ 法、 $\epsilon$ 算法、Levin  $t$ 変換などが該当する。  $N > 1$  の場合は、上記の加速法をベクトル列に拡張した加速法が該当する。これらの補外法のうち、一般化 $\rho$ 算法、修正 $\epsilon$ 算法、修正 Aitken  $\delta^2$ 法は、反復列の漸近展開についての情報を必要とするので、本論文では取り上げない。

## 5. 数値例

反復列の漸近的性質が決定（あるいは推定）できる特異不動点問題を用いて、前節で述べた 3 つの算法の比較を行う。適用する補外法は、算法 I ( $\rho$ 算法、 $W$ 変換、Levin  $v$ 変換)、算法 II ( $\epsilon$ 算法) および算法 III ( $\epsilon$ 算法) である。算法 II, III の  $k$  は次のように決める。  $N = 1$  のときは、 $k = 2$  とし、例 2, 5, 6 のときは  $k = 4$ 、例 3 については算法 II は  $k = 4$ 、算法 III は  $k = 2$  とする。  $N > 1$  の場合の  $\rho$ 算法、 $W$ 変換、Levin  $v$ 変換、 $\epsilon$ 算法はそれぞれ、ベクトル  $\rho$ 算法 (VRA)[10]、ベクトル  $W$ 変換 (VWT)[10]、ベクトル Levin  $v$ 変換 (VLV)[11]、位相的  $\epsilon$ 算法 (TEA)[2] である。

例 1.  $E = R$  の特異不動点問題

$$G(x) = x - \frac{1}{2}(x-1)^2 + \frac{1}{4}(x-1)^3, \quad x_0 = 2$$

を考える。Sablonnière の定理より、

$$x_n = 1 + \frac{2}{n} + O\left(\frac{1}{n^2}\right).$$

例 2.  $E = \mathbf{R}^2$  の特異不動点問題

$$G \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{1}{4}x^3 - \frac{5}{4}x^2 + 2x + \frac{3}{2}y - \frac{3}{2} \\ -\frac{1}{8}x^2 + \frac{13}{20}x + y^3 - \frac{7}{2}y^2 + \frac{21}{5}y - \frac{49}{40} \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} x_0 \\ y_0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1.5 \\ 1.25 \end{pmatrix},$$

を考える.  $x_n - 1 = 2(y_n - 1)$  だから, 2.2 より,

$$\begin{pmatrix} x_n \\ y_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} + \frac{1}{n} \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \end{pmatrix} + O \left[ \frac{1}{n^2} \right],$$

となる. ここで,  $a_n \in \mathbf{R}$  ( $a_n \rightarrow 0$ ) に対し,  $O[a_n]$  は,  $\|O[a_n]\| = O(a_n)$  を満たす  $E$  の元を表す.

例 3.  $E = \mathbf{C}^2$  の特異不動点問題

$$G \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x - 2(y - 2 - \frac{i}{2})^2 + \frac{1}{4}(x - 1 - i)^3 \\ y - \frac{1}{4}(x - 1 - i)^2 + (y - 2 - \frac{i}{2})^3 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} x_0 \\ y_0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 + 2i \\ 2.5 + i \end{pmatrix},$$

を考える.  $x_n - 1 - i = 2(y_n - 2 - \frac{i}{2})$  で  $|\operatorname{Re}(x_n - 1)| > |\operatorname{Im}(x_n - i)|$  だから, 2.3 より,

$$\begin{pmatrix} \operatorname{Re} x_n \\ \operatorname{Re} y_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} + \frac{1}{n} \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \end{pmatrix} + O \left[ \frac{1}{n^2} \right],$$

となる.

例 4. ([7])  $E = \mathbf{R}$  の特異不動点問題  $G(x) = 2\sqrt{x-1}$ ,  $x_0 = 4$  を考える.

$$G(x) = x - \frac{1}{4}(x-2)^2 + \frac{1}{8}(x-2)^3 + O((x-2)^4)$$

だから, Sablonnière の定理より,

$$x_n = 2 + \frac{4}{n} + \frac{4 \log n}{n^2} + O\left(\frac{1}{n^2}\right).$$

例 5.  $E = \mathbf{R}^2$  の特異不動点問題

$$G \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -\frac{1}{4}x^2 + \frac{3}{4}x + \frac{3}{2}y - 1 \\ \frac{2}{5}x - \frac{1}{2}y^2 + \frac{6}{5}y - \frac{1}{10} \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} x_0 \\ y_0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1.5 \\ 1.25 \end{pmatrix},$$

を考える.  $x_n - 1 = 2(y_n - 1)$  だから, 2.2 より,

$$\begin{pmatrix} x_n \\ y_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} + \frac{1}{n} \begin{pmatrix} 4 \\ 2 \end{pmatrix} + \frac{\log n}{n^2} \begin{pmatrix} -4 \\ -2 \end{pmatrix} + O \left[ \frac{1}{n^2} \right],$$

となる.

例 6. 特異連立非線型方程式を簡易 Newton 法で解く.

$$\begin{cases} xy + y^2 - 3y + 1 = 0 \\ x^2 - 4x + y^2 - 2y + 4 = 0 \\ x + z^2 - 2z = 0 \end{cases}$$

初期値を  $(x_0, y_0, z_0)^T = (1.1, 1.5, 2.0)^T$  とすると, 反復は

$$G \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} - \frac{1}{348} \begin{pmatrix} -110x^2 + 440x + 100xy - 10y^2 - 80y - 340 \\ 150x^2 - 600x + 180xy + 330y^2 - 840y + 780 \\ 55x^2 - 46x - 50xy + 5y^2 + 40y + 174z^2 - 348z + 170 \end{pmatrix}$$

により与えられる. Decker and Kelley[4]の結果より

$$|z_n - 1| = O(|y_n - 1|), \quad |x_n - 1| = O(|z_n - 1|^2)$$

となる. さらに, 数値実験より

$$\|(x_n, y_n, z_n)^T\|_\infty = z_n - 1$$

$$z_n = 1 + \frac{a_1}{n} + \frac{a_2 \log n}{n^2} + O\left(\frac{1}{n^2}\right)$$

が予想される.

例 7.  $E = \mathbf{R}$  の特異不動点問題

$$G(x) = x - \frac{1}{2}(x-1)^3, \quad x_0 = 2$$

を考える. Sablonniere の定理より,

$$x_n = 1 + \frac{1}{\sqrt{n}} - \frac{3 \log n}{8 n \sqrt{n}} + O\left(\frac{1}{n \sqrt{n}}\right).$$

計算は, 桁落ちと丸め誤差の影響を少なくするため 4 倍精度 (10 進約 33 桁) で行った.  $G(x)$  の計算回数  $n$  と有効桁数

$$-\log_{10} \|x^n - x^*\|_\infty$$

を表 1~7 に与える. 比較のため, 表 1-1~表 7-1 に倍精度 (10 進約 16 桁) による計算結果も与える.

表 1. 例 1 の有効桁数 (4 倍精度)

$n$	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		$\rho$ alg	$W$	Levin $v$	$\epsilon$ alg	$\epsilon$ alg
4	0.42	0.42	0.42	0.81	1.20	1.20
8	0.66	4.39	2.74	2.73	3.04	2.92
12	0.82	8.22	5.58	5.92	6.67	5.17
16	0.93	12.67	9.36	8.07	13.95	7.95
20	1.02	16.07	10.99	11.79		11.28
24	1.10	20.55	10.98	16.03		15.17
28	1.16	20.25	13.82	17.99		19.63
32	1.22	20.62	13.93	17.17		21.94
36	1.27	21.10	13.93	17.30		21.15
40	1.31	20.59	13.93	16.27		21.66
44	1.35	21.03	14.26	16.29		21.62
48	1.39	19.88	14.26	16.84		22.01
52	1.42	20.06	14.26	16.95		21.02
56	1.46	20.54	14.26	16.46		20.51
60	1.49	20.87	14.96	16.36		20.16

表 1-1. 例 1 の有効桁数 (倍精度)

$n$	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		$\rho$ alg	$W$	Levin $v$	$\epsilon$ alg	$\epsilon$ alg
4	0.42	0.42	0.42	0.81	1.20	1.20
8	0.66	4.39	2.74	2.73	3.04	2.92
12	0.82	8.22	5.58	5.29	6.67	5.17
16	0.93	11.19	7.97	7.24		7.95
20	1.02	10.82	7.70	7.00		8.81
24	1.10	11.24	7.75	6.93		8.09
28	1.16	10.85	7.74	7.06		8.60
32	1.22	10.90	6.49			9.63
36	1.27	11.05	6.49			
40	1.31	10.13	6.49			
44	1.35	10.24	6.49			
48	1.39	10.21	6.49			
52	1.42	10.72	7.54			
56	1.46	9.85	7.54			
60	1.49	11.20	7.54			

表 2. 例 2 の有効桁数 (4 倍精度)

n	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		VRA	VWT	VLV	TEA	TEA
4	0.59	1.99	1.52	1.52		1.04
8	0.77	5.69	3.70	2.98		1.79
12	0.90	9.84	6.64	7.16		2.95
16	0.99	14.30	10.87	8.92	3.92	3.92
20	1.07	18.36	10.97	12.00		5.68
24	1.14	19.87	13.88	18.34		3.85
28	1.20	19.20	13.93	17.47		3.87
32	1.25	20.53	14.26	16.07	9.64	5.25
36	1.30	20.07	14.26	15.68		7.99
40	1.34	20.73	14.26	15.64		8.59
44	1.38	19.43	14.72	15.40		11.40
48	1.41	20.05	14.72	15.49	11.61	12.29
52	1.44	20.24	14.72	15.64		13.19
56	1.47	20.59	14.97	15.42		16.04
60	1.50	20.07	15.48	15.64		17.23

表 2-1. 例 2 の有効桁数 (倍精度)

n	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		VRA	VWT	VLV	TEA	TEA
4	0.59	1.99	1.52	1.52		1.04
8	0.77	5.69	3.70	2.98		1.79
12	0.90	9.56	6.64	7.17		2.95
16	0.99	9.98	7.41	7.12	2.52	2.52
20	1.07	10.48	7.21	8.10		2.69
24	1.14	11.37	7.21	6.66		4.98
28	1.20	10.52	6.29	7.55		4.71
32	1.25	10.25	6.29	6.20	6.50	6.16
36	1.30	9.83	6.91			7.64
40	1.34	9.99	6.91			6.94
44	1.38	10.54	7.17			6.97
48	1.41	10.51	7.17		6.49	6.89
52	1.44	10.50	7.46			6.88
56	1.47	9.96	7.24			6.98
60	1.50	9.60	7.24			6.88



表 3. 例 3 の有効桁数 (4 倍精度)

n	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		VRA	VWT	VLV	TEA	TEA
4	0.44	1.41	0.76	0.76		0.69
8	0.66	4.55	2.81	2.23		2.08
12	0.82	8.38	5.68	3.66		3.94
16	0.93	12.74	10.30	5.64	3.29	6.32
20	1.02	16.68	11.41	8.01		9.26
24	1.10	20.82	13.62	10.72		12.76
28	1.16	19.82	14.12	13.34		16.83
32	1.22	20.15	14.10	15.17	9.27	21.76
36	1.27	20.04	14.26	14.85		21.63
40	1.31	20.25	14.26	15.14		20.91
44	1.35	20.94	14.25	14.52		21.63
48	1.39	19.53	14.25	14.26	12.17	21.01
52	1.42	20.13	14.25	13.82		21.73
56	1.45	20.30	14.25	14.23		21.31
60	1.48	20.52	14.25	15.17		21.06

表 3-1. 例 3 の有効桁数 (倍精度)

n	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		VRA	VWT	VLV	TEA	TEA
4	0.44	1.41	0.76	0.76		1.18
8	0.66	4.55	2.81	2.23		2.08
12	0.82	8.38	5.68	3.66		3.94
16	0.93	9.73	7.53	5.61	3.29	6.32
20	1.02	10.56	7.34	6.04		8.72
24	1.10	10.35	7.89	6.16		7.79
28	1.16	10.55	7.27	6.05		9.04
32	1.22	9.79	6.19	5.64	6.86	8.07
36	1.27	10.37	6.81			8.86
40	1.31	10.05	6.80			8.88
44	1.35	10.17	7.47			8.59
48	1.39	10.25	6.84			5.31
52	1.42	10.14	7.06			5.34
56	1.45	10.12	7.31			5.35
60	1.48	9.91	7.31			5.43

表 4. 例 4 の有効桁数 (4 倍精度)

$n$	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		$\rho$ alg	$W$	Levin $v$	$\epsilon$ alg	$\epsilon$ alg
4	0.11	1.09	1.19	1.19	0.92	0.92
8	0.34	2.73	3.33	2.76	2.66	2.07
12	0.49	4.03	5.72	4.12	6.04	4.15
16	0.60	4.82	6.82	5.27	12.81	6.91
20	0.70	5.24	6.93	4.66		10.33
24	0.77	5.60	6.93	6.51		14.40
28	0.84	4.70	6.93	6.90		19.10
32	0.90	6.02	6.93	7.18		22.20
36	0.95	6.11	11.63	7.42		22.63
40	0.99	6.21	11.64	7.61		21.83
44	1.03	6.16	12.29	7.78		21.37
48	1.07	6.24	12.29	7.93		21.39
52	1.11	6.29	12.29	7.95		21.98
56	1.14	5.93	12.64	8.01		20.52
60	1.17	6.45	12.64	8.37		18.93

表 4-1. 例 4 の有効桁数 (倍精度)

$n$	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		$\rho$ alg	$W$	Levin $v$	$\epsilon$ alg	$\epsilon$ alg
4	0.11	1.09	1.19	1.19	0.92	0.92
8	0.34	2.73	3.33	2.76	2.66	2.07
12	0.49	4.03	5.73	4.12	6.04	4.15
16	0.60	3.86	7.46	5.27		6.91
20	0.70	4.66	9.31	4.66		8.76
24	0.77	4.93	7.51	5.17		8.00
28	0.84	4.98	7.47	5.39		8.29
32	0.90	4.72	5.46	5.09		9.03
36	0.95	4.79	5.46			7.35
40	0.99	4.78	5.46			7.16
44	1.03	5.14	5.19			
48	1.07	5.00	4.96			
52	1.11	5.01	4.96			
56	1.14	4.73	5.19			
60	1.17	5.16	5.19			

表 5. 例 5 の有効桁数 (4 倍精度)

n	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		VRA	VWT	VLV	TEA	TEA
4	0.49	1.74	1.56	1.56		0.85
8	0.62	3.27	3.49	2.64		2.03
12	0.72	4.18	6.12	4.10		3.04
16	0.80	4.85	7.65	5.11	4.01	4.01
20	0.87	5.36	9.17	5.87		6.02
24	0.92	5.58	12.32	6.43		3.97
28	0.97	5.74	12.32	6.83		4.13
32	1.02	5.88	12.25	7.13	10.22	4.43
36	1.06	6.00	12.09	7.37		8.90
40	1.10	6.11	12.23	7.57		9.50
44	1.13	6.20	12.14	7.74		10.11
48	1.16	6.12	12.57	7.89	10.82	13.66
52	1.19	6.19	12.57	8.00		14.56
56	1.22	6.26	12.60	8.02		17.87
60	1.24	6.32	11.43	8.39		17.89

表 5-1. 例 5 の有効桁数 (倍精度)

n	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		VRA	VWT	VLV	TEA	TEA
4	0.49	1.74	1.56	1.56		0.85
8	0.62	3.27	3.49	2.64		2.03
12	0.72	4.19	5.81	4.10		3.04
16	0.80	4.38	6.27	5.05	2.30	2.30
20	0.87	4.67	6.23	5.12		2.50
24	0.92	4.46	4.78	5.05		4.94
28	0.97	4.85	4.65	5.01		5.05
32	1.02	4.88	4.81	5.30	6.46	6.12
36	1.06	4.77	4.88			7.74
40	1.10	4.86	4.88			7.94
44	1.13	4.58	5.30			7.52
48	1.16	4.99	5.14		6.46	7.27
52	1.19	4.72	5.30			7.63
56	1.22	5.11	5.53			8.65
60	1.24	5.21	5.65			5.76

表 6. 例 6 の有効桁数 (4 倍精度)

n	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		VRA	VWT	VLV	TEA	TEA
4	0.59	1.50	1.04	0.59		0.79
8	0.79	2.69	3.00	3.38		1.28
12	0.92	3.86	3.79	4.68		1.53
16	1.02	4.60	5.91	5.59	2.38	2.38
20	1.10	5.09	6.24	6.27		3.24
24	1.17	5.37	6.74	6.80		3.88
28	1.22	5.73	7.90	7.18		4.50
32	1.28	6.04	7.93	7.47	5.69	5.11
36	1.32	6.18	8.05	7.70		6.17
40	1.36	6.30	8.04	7.90		7.91
44	1.40	6.41	8.61	8.07		8.08
48	1.43	6.50	8.82	8.21	10.09	8.91
52	1.46	6.42	8.82	8.32		9.81
56	1.49	6.49	8.77	8.33		10.72
60	1.52	6.56	9.13	8.40		11.62

表 6-1. 例 6 の有効桁数 (倍精度)

n	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		VRA	VWT	VLV	TEA	TEA
4	0.59	1.50	1.04	0.59		0.79
8	0.79	2.69	3.00	3.38		1.28
12	0.92	3.86	3.79	4.68		1.53
16	1.02	4.60	5.89	5.59	2.38	2.38
20	1.10	4.83	6.19	5.90		3.24
24	1.17	5.03	6.23	5.80		3.88
28	1.22	5.12	4.87	5.57		4.50
32	1.28	4.91	5.05	5.77	5.69	5.11
36	1.32	4.98	5.05			6.17
40	1.36	4.74	5.27			8.37
44	1.40	4.83	5.27			7.91
48	1.43	5.24	5.46		5.71	7.07
52	1.46	5.27	5.46			6.38
56	1.49	5.02	5.72			6.97
60	1.52	5.09	5.72			6.82

表 7. 例 7 の有効桁数 (4 倍精度)

$n$	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		$\rho$ alg	$W$	Levin $v$	$\epsilon$ alg	$\epsilon$ alg
4	0.44	0.80	0.64	0.64	0.67	0.67
8	0.54	1.13	2.50	2.69	2.29	1.98
12	0.60	1.43	5.28	3.92	7.13	4.02
16	0.65	1.58	6.70	4.73		6.70
20	0.69	1.70	6.74	5.29		10.05
24	0.73	1.84	7.03	5.76		14.07
28	0.76	1.92	7.03	6.09		18.78
32	0.78	2.00	7.03	6.33		20.74
36	0.81	2.03	9.80	6.52		20.22
40	0.83	2.06	9.80	6.69		20.70
44	0.84	2.09	9.80	6.96		19.41
48	0.86	2.12	9.80	6.96		19.41
52	0.88	2.10	10.15	7.07		18.94
56	0.89	2.12	10.15	7.07		19.44
60	0.91	2.14	10.15	7.11		19.00

表 7-1. 例 7 の有効桁数 (倍精度)

$n$	Base	Algorithm I			Alg II	Alg III
		$\rho$ alg	$W$	Levin $v$	$\epsilon$ alg	$\epsilon$ alg
4	0.44	0.80	0.64	0.64	0.67	0.67
8	0.54	1.13	2.50	2.69	2.29	1.98
12	0.60	1.43	5.28	3.92	6.35	4.02
16	0.65	1.58	6.13	4.70		6.70
20	0.69	1.64	5.81	4.72		8.47
24	0.73	1.69	5.83	4.73		8.53
28	0.76	1.66	6.16	4.70		8.48
32	0.78	1.69	5.97	4.52		8.01
36	0.81	1.71	5.97			8.00
40	0.83	1.79	4.51			8.01
44	0.84	1.66	4.51			8.48
48	0.86	1.77	4.51			8.53
52	0.88	1.70	4.51			8.47
56	0.89	1.80	4.51			6.70
60	0.91	1.82	4.51			8.37

## 6. 結論

Sablonnière の定理の条件 (i) を満たす問題に対しては,  $\rho$  算法の族を用いた算法 I と  $\epsilon$  算法の族を用いた算法 III が著効. 条件 (ii)(iii)(iv) を満たす問題に対しては,  $\epsilon$  算法の族を用いた算法 III が最良である. 算法 II は補外効果はあるが, 桁落ちの影響が大きい. 算法 III では例 6 を除いて, 4 倍精度で計算すると倍精度で計算した際の 2 倍またはそれ以上の有効桁数が得られる.

$N$  次元の特異反復列の漸近挙動についての定理, 算法 I~III の丸め誤差解析, 算法 II, III の収束定理は今後の課題である.

## 引用文献

- [1] C. Brezinski, Application de l' $\epsilon$ -algorithme à la résolution des systèmes non linéaires, C.R.Acad.Sc.Paris, t.271(1970), Série A 1174-1177.
- [2] C. Brezinski, Généralisations de la transformation de Shanks, de la table de Padé et de l' $\epsilon$ -algorithme, Calcolo 12(1975), 317-360.
- [3] N. G. de Bruijn, *Asymptotic Methods in Analysis* (Dover Publ., New York, 1981).
- [4] D. W. Decker and C. T. Kelley, Sublinear convergence of the chord method at singular points, Numer. Math. 42(1983), 147-154.
- [5] E. Gekeler, On the solution of systems of equations by the epsilon algorithm of Wynn, Math. Comp. 26(1972), 427-436.
- [6] P. Henrici, *Elements of Numerical Analysis* (John Wiley and Sons, New York, 1964).
- [7] 伊理正夫, 数値計算 (朝倉書店, 1981).
- [8] Kh. Jbilou and H. Sadok, Some results about vector extrapolation methods and related fixed-point iterations, J. Comp. Appl. Math. 36(1991), 385-398.
- [9] T. Noda, The Steffensen iteration method for systems of nonlinear equations. II, Proc. Japan Acad. 63 Ser. A (1987), 186-189.
- [10] N. Osada, Acceleration methods for vector sequences, J. Comp. Appl. Math. 38(1991), 361-371.
- [11] N. Osada, Extensions of Levin's transformations to vector sequences, Numer. Algorithms (to appear).
- [12] A.M. Ostrowski, *Solution of equations and systems of equations, 2nd ed.* (Academic Press, New York, 1966).
- [13] P. Sablonnière, Convergence acceleration of logarithmic fixed point sequences, J. Comp. Appl. Math. 19(1987), 55-60.
- [14] P. Sablonnière, Comparison of four algorithms accelerating the convergence of a subset of logarithmic fixed point sequences, Numer. Algorithms 1(1991), 177-198.
- [15] G.A. Sedogbo, Convergence acceleration of some logarithmic sequences, J. Comp. Appl. Math. 32(1990), 253-260.
- [16] S. Skelboe, Computation of the periodic steady-state response of nonlinear networks by extrapolation methods, IEEE Trans. Circuits and Systems 27(1980), 161-175.
- [17] D. A. Smith, W. F. Ford and A. Sidi, Extrapolation methods for vector sequences, SIAM Rev. 29(1987), 199-233.